

# 慶応の挑戦「日本のどこにもない大学院」

次世代リーダーは巨大システムを動かす「知恵」が不可欠。その着想は私大に「藤沢」級の新風を吹かせるか。

安政5（1858）年、福沢諭吉は江戸に下った。大坂で緒方洪庵の適塾塾頭だった彼は、江戸の築地鉄砲洲に住んで蘭学を教え始めた。この「一小家塾」が現在の慶応義塾の前身である。だから、来年2008年は慶応義塾にとって創立150年にあたる。その記念事業の目玉として、新しい大学院二つが4月に日吉キャンパスで開設される。

既存の医学部と看護医療学部を薬学部を加えた「医の総合化」を実現させたばかり。全国の私学関係者をあつとわせた仕掛人であり「私学のアントレプレナー（起業家）」とも呼ばれる安西祐一郎塾長の、共立薬科統合に続くチャレンジである。

築力、あるいは構想力を意味してきます。今の日本にはそうした戦略構築力といったものが決定的に欠けている。そうした構築力を教育によってどう育てることができるのか。考えた末に、米国の主要10大学には設置されているSDMとKMDの2研究科が、日本の大学に欠けていることに気づいたので

してきた慶応が、いま日本と世界の未来を創造する人材を輩出する教育研究機関を創設し、21世紀の新潮流を創造していく」と訴えた。

安西塾長によれば、「知識」と両輪をなす「知恵」を教えるのがSDMとKMDの目的だということになる。日本のどこにもない分野を切り開こうという意気込み、そして戦略家不在が今日の日本の迷走を招いたという危機感も分かる。だが、「デザイン」に意匠や図案、設計という訳語しかない日本の社会で、慶応の意図はどこまで伝わるのだろうか。

「ここであるデザインとは、戦略構」

「均衡感覚」を教える

SDM研究科委員長就任予定の狼嘉彰教授は、大規模宇宙システムの設



安西祐一郎塾長（上）とSDM研究科委員長に就任する狼嘉彰教授



安西祐一郎塾長（上）とSDM研究科委員長に就任する狼嘉彰教授

計と運営の専門家、元宇宙開発事業団の技術研究本部研究総監だった経歴を持つ人である。

——SDMというシステムはどう定義されるのですか。

「主として対象にするのは複雑で大規模なシステムです。システム・オブ・システムズ、つまりシステムの複合体で、ロケットや化学プラント、自動車や家電のような大量生産システム、鉄道、原子力などの発電プラント、銀行や証券取引などの社会システムを含んでいます」

測の事態は場当たりのパッチワークでは防げません。将来予測を含めてシステムのあらゆるファクターを洗い出し、総合的にバランスさせることが必要になります」

——価値観の多様化に対応できる共生的で維持可能なシステムの設計とマネジメントは、どんな人材が担うことができるのでしょうか。

教授陣にトヨタなどの人材

内外から錚々たる人材を教授陣にそろえようとしている。SDMでは豊田中央研究所の主任研究員や米田3Mの先端製品開発スペシャリストのほか、外交ジャーナリストの手嶋龍一氏も加わる予定だ。KMDでは竹中平蔵・元総務相のほか、元マイクrosoft社長の古川亨氏が教授予定者に名を連ねている。SDMは修士課程77人（入学定員）、後期博士課程11人（同）、KMDは修士80人、後期博士10人でスタートするが、応募者は社会人が多いという。

「社会の多極化とシステムの複雑化で、巨大システムの綻びや限界があちこちで露呈しています。しかし不

「従来のシステムマネジャーは、社内研修+実地研修（OJT）+プロジェクト経験で育てられました。で

も、現代の巨大システムは5年程度で完了というようにサイクルが短く、経験を積みながらの育成法では間に合わない。システムチックに集中的にアプローチを叩き込む必要がある。SDMでは新しい技術社会システムを提案・実現し、事業を先導する創造的システムデザイナーと、高度化したシステムのライフサイクル全般を管理するシステムマネジャーの育成をめざしています」

るか为目标としています」

稲蔭教授はそれを「メディア・イノベーター」と呼んでいる。理系色の強いSDMに比べて、コンテンツ主体で文系色が強そうだが、両研究科とも日吉の新研究棟に入るので、「運営はそれぞれ独立して動かすにしろ、双方のコラボレーションは十分模索できる」としている。

金データシステムですか。

「従来のシステムマネジャーは、社内研修+実地研修（OJT）+プロジェクト経験で育てられました。で

1990年のSFC（慶応大学湘南藤沢キャンパス）が私学経営に新風を巻き起こしたように、SDMとKMDは新たな私学トレンドの起爆剤たりうるだろうか。

1990年のSFC（慶応大学湘南藤沢キャンパス）が私学経営に新風を巻き起こしたように、SDMとKMDは新たな私学トレンドの起爆剤たりうるだろうか。

「社会の多極化とシステムの複雑化で、巨大システムの綻びや限界があちこちで露呈しています。しかし不

「従来のシステムマネジャーは、社内研修+実地研修（OJT）+プロジェクト経験で育てられました。で

も、現代の巨大システムは5年程度で完了というようにサイクルが短く、経験を積みながらの育成法では間に合わない。システムチックに集中的にアプローチを叩き込む必要がある。SDMでは新しい技術社会システムを提案・実現し、事業を先導する創造的システムデザイナーと、高度化したシステムのライフサイクル全般を管理するシステムマネジャーの育成をめざしています」

るか为目标としています」

稲蔭教授はそれを「メディア・イノベーター」と呼んでいる。理系色の強いSDMに比べて、コンテンツ主体で文系色が強そうだが、両研究科とも日吉の新研究棟に入るので、「運営はそれぞれ独立して動かすにしろ、双方のコラボレーションは十分模索できる」としている。